様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３０２

研究課題名（和文）20世紀アメリカ演劇における戦争表象の研究

研究課題名（英文）The Study of Representations of War in Twentieth-Century American Drama

研究代表者
相原　直美（Aihara, Naomi）

千葉工業大学・工学部・准教授

研究者番号：５０３３７７０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では20世紀のアメリカ演劇に於ける戦争表象の実践を調査した。本研究の特徴は、第二次世界大戦中から戦後にかけての演劇がその当時台頭していた戦争の写真や映像との拮抗の中で独自の表象可能性を探り、写真や映像では到達しえない倫理の地平を切り開いたことを明らかにすることであった。研究期間中は主に20世紀アメリカの代表的な劇作家リリアン・ヘルマンとテネシー・ウィリアムズの戦時中から戦後にかけて発表・上演された作品のテクストをその当時の映像文化との比較対照を通じて精読し、彼らの作品の根底にある平和のレトリックを探ることを試みた。

研究成果の概要（英文）：This project aims to examine how war was illustrated and represented on the American stage in the 20th century, especially during and after World War II. By paying close attention to the possible influence of war photography and newsreels upon the works mainly of Lillian Hellman and Tennessee Williams, it attempts to not only uncover their efforts to capture the reality and the sufferings of war, in contest with photographic medias of that time, but also to certify the profound rhetoric of peace masterly contrived in their plays, that was able to arouse ethical feelings among the spectators.

研究分野：20世紀アメリカ演劇

キーワード：20世紀アメリカ演劇　アメリカ演劇　テネシー・ウィリアムズ　リリアン・ヘルマン

１．研究開始当初の背景

(1)9.11 の同時多発テロ以降、自国アメリカが推し進める中東に於ける戦争をどう捉えるべきなのか、戦地から遠く離れたアメリカに住む知識人たちは自問自答を繰り返してきた。特にアブグレイブ刑務所に於けるアメリカ兵による捕虜に対する虐待写真は、戦争の厳しいリアリティを衝撃的に伝えると同時に、写真や映像に内在する暴力性とポルノグラフィックな側面をも暴く結果となった。批評家スーザン・ソンタグやジュディス・バトラーは、写真や映像が、一見遠い地の悲惨な状況をリアルに伝えているようでいながら、実際にはセンセーショナルなメディアとして安易に消費されること、また、客観性を保証しているようでいながら実際には国家、時の権力者、あるいはカメラを覗く人間によって強いられた視点からみた「現実」でしかないことに改めて注目し、果たしてこれらの映像が遠い戦地の人間の苦しみと共苦の感情を我々に呼び覚ますものとして有効なのか、ということを問い直している。

(2)上記と同時進行的に、それまで極めてパーソナルな作家と見なされてきた 20 世紀アメリカの代表的な劇作家テネシー・ウィリアムズを「社会派」として捉える潮流が生まれてきた。これはウィリアムズのデビュー前の未発表作品や彼のジャーナル等の出版が相次ぎ、特にデビュー前のウィリアムズが実際には左翼的思想を持っていたことが明らかになったことが大きなきっかけである。それまで彼の作品は社会や政治とは無関係に論じられる傾向にあったが、近年の研究では、彼の政治性、社会性が彼の作品群には時に示唆的に、時に明確に織り込まれていることが明らかになってきている。その潮流の中でウィリアムズが実際には「第二次世界大戦中・戦後」の作家であることも意識されるようになる。

(3)本研究はこの二つの潮流の交差したところに位置している。ウィリアムズがブロードウェイでのデビューを果たした作品『ガラスの動物園』(1945) が出版されたとき、その「上演の際の覚書」の中で彼は photographic likeness（写実主義）への嫌悪を露わにしている。彼の反感は写実主義というよりも、むしろ photography（写真）への懐疑なのではないのか。この問いが立脚点となり、映像とは異なる演劇に於ける反 photographic な戦争表象についての考察を特に彼と彼の周辺作家の作品を通じて試みたいと思い、申請した。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は 20 世紀以降のアメリカ演劇および舞台芸術における戦争表象の実践を調査し、その社会的影響力と倫理的有効性について考察を行うものである。

(2) 戦争報道に於ける直接性・即時性の追求とともに発展を遂げていった写真や映像技術との拮抗の中、20 世紀以降のアメリカ社会に於いて、戦争の実態を映し出す媒体として演劇はいかなる役割を果たしていたのかについての歴史的調査を行い、その実態に迫りたいと考えた。

(3) 最終的には、写真や映像の持つ直接性・即時性・衝撃性を持ち合わせない演劇が、その限界に立脚しつつ切り開いた独自の戦争表象の在り方、そしてそれによって演劇空間内に生み出される共感・共苦の倫理的有効性についての考察を試みたいと考えた。

３．研究の方法

(1)基本的な研究方法としては、アメリカ演劇のテクストを通読し、分析することであったが、演劇テクストのほかに以下のとおり、テーマに関連する他分野の書籍や映像資料も使用した。

(2)第二次世界大戦中の戦争報道に関する文献、雑誌に掲載された写真、当時の新聞などの報道についての文献を収集し、当時の報道方法の実態を調査した。

(3)第二次世界大戦と演劇やそれに類する舞台芸術との関係についての文献を収集し、当時のアメリカに於ける演劇・舞台事情や表象方法の実態を調査・分析した。

(4)第二次世界大戦中から戦後にかけてのニュースやドキュメンタリーの映像資料(DVD)や文献を収集し、戦争がどのように撮影、記録され、報道されていたかなどを調査・分析した。

(5)第二次世界大戦中から戦後にかけて上映された戦争映画の映像・文献資料を収集し、その当時、どのように映画などで戦争が描かれていたのかを調査・分析した。

(6)演劇表象についての文献を収集し、リアリズムから前衛演劇に至る演劇の理論と表象について調査・分析した。

(7)倫理をめぐる哲学・思想書を収集し、倫理と芸術の関係、倫理と暴力、倫理と戦争についての理論について調査・分析した。

(8)心理学関係の文献を収集し、アメリカのリアリズム演劇の主流をなす家族劇に於ける人間関係の力学を心理学的側面から調査・分析をし、家族劇のもつ表象の可能性の調査を行った。

４．研究成果

(1) これまでの 1940 年代のアメリカ演劇研究において、映画・美術との比較研究は存在していたものの、戦争写真・戦争映像（ニュースリール）の影響およびそれらとの比較研究はほとんどなされてきていないように思われる。その理由は演劇がフィクションであるのに対し、戦争写真や映像は「客観的な情報」であるとの認識から、質の異なる二つの媒体を比較すること自体に意味を見いだせなかったからであろう。しかし、本研究を通して明らかになったのは、戦争写真や映像もまた「演出」された「フィクション」である

ということ、またこれらの戦争写真や映像も「観客」への訴えかけをその目的としていたことである。つまり、戦時中から戦後にかけての戦争写真・映像と、その当時の演劇はある点に於いて同質の媒体であったと言える。ただし、映像はそのインパクト、直接性、即時性ゆえに本来の目的と関係なく、安易に観客に消費され、時にポルノグラフィックな視点を誘発する傾向があるのに対し、演劇は逆にその非直接性と非即時性ゆえにその危険性を免れてきており、映像よりもむしろより複雑なメッセージ性を持ちうる媒体であることが、特に 20 世紀アメリカ演劇を代表する劇作家テネシー・ウィリアムズ、アーサー・ミラー、リリアン・ヘルマンらの作品を分析することで明らかとなった。

(2)戦後アメリカ演劇の二人の巨星ウィリアムズとミラーは、まさに写真や映像を通じての戦争報道が現在の形へと成立していく第二次世界大戦中に青春時代を過ごしている。彼らを取り巻いていた戦争写真や映像は、自ずと彼らのドラマツルギーに影響を及ぼしたものと考えられる。特にウィリアムズが掲げた plastic theatre というドラマツルギーに見受けられる photographic（写実主義）への嫌悪は、長年考えられてきた彼の演劇的リアリズムへの嫌悪ではなく、当時あふれかえっていた戦争写真や映像への懐疑から来たものであると思われる。なぜならば、彼がこの plastic theatre を提唱していた時代に書いた作品（『ガラスの動物園』(1945)や『欲望という名の電車』(1947)）は単に戦前・戦後を背景としているだけでなく、劇そのものがメタ的なウィリアムズの戦争表象論である可能性がテクスト分析を通じて見受けられるからである。

(3) 映像や写真のもつインパクトは、観客の中に強い感情を引き起こし、人々の間に「連帯意識」を生み出す力をもつ。それゆえに戦時中に於いては国家的戦略としての戦争プロパガンダへと組み込まれていく危険性を持っていた。しかし、演劇は直接的な映像のインパクトとは異なるより複雑な経路による訴えかけを観客に対して行うため、思考することを促し、その結果衝動的な「連帯意識」よりも、むしろ観客に個別的に訴えかけたのではないだろうか。例えば、戦争称揚演劇として考えられてきたヘルマンの『ラインの監視』(1941)は、現在の視点からの再読を試みるとき、単純には戦争称揚とは言い切れない複雑な要素がテクスト内に存在している。特に注目に値するのは、その劇の中心に置かれている「母・娘」と「父・息子」との対比である。盲目的な主従関係を築いている父と息子とは異なり、この劇に於ける母と娘は互いに複雑な感情を抱えており、その感情は最後まで解消されることはない。この劇に於ける母と娘の葛藤が、この劇に於ける「戦争」への重要なコメンタリーとなっていると考えられる。このように演劇は映像や映画よりもはるかに複雑な経路をたどって戦争を語っており、これは観客や読者に「分析すること」「解釈すること」を促している。このような手法を取り込むことにより、演劇は、観客を安易に他者との連帯意識へと駆り立てるのではなく、むしろ観客一人一人の個別性に訴えかけてきたのではないだろうか。そしてその個別性の先には、「他者」を決して自らの内には取り込み支配することのできない絶対的「他者」とする「倫理」への意識があるのではないだろうか。

(4)観客の個別性に訴えかける手法としてウィリアムズが採用したのは「痛み」の感覚であるように思われる。「痛み」を表現する劇中の登場人物達の言葉・台詞・動き等のもつ身体性が、観客個人に「身体的」に訴えかけ、その身体性によって人は遠い地にいる「他者」の痛みを追体験することができるのではないだろうか。「痛み」という感覚は、極めて「個人的」であると同時に他者へと結びつく「社会的」感覚でもあるようにも思われ、ウィリアムズの演劇に存在する「痛み」はまさに「個」から「他者」へと貫く「装置」であるように思われる。哲学者エマニュエル・レヴィナスの思想を説明する際に熊野は「倫理とは、とりあえず抽象的にいって他者との関係それ自身のことである」とする。つまり「倫理」は「他者」への意識なくしては存在し得ないのであり、ウィリアムズ劇においては「痛み」という「身体性」こそが「他者」へと接続する装置となり、その先に倫理の地平が広がるのである。

<引用文献>

熊野純彦、「世界と他者を肯定する思考のために：レヴィナスのモチーフをめぐって」、『現代思想：3 月臨時増刊号・総特集・レヴィナス』、青土社、第４０巻第３号、２０１２、322-334.

(5)本研究を進めるにあたって当初予期していないことが起きた。一つは、この研究に於いては、演劇のみならず「倫理」をめぐる哲学、戦争表象をめぐる舞台・映像表象論、アメリカ演劇の主流をなす家族劇の人間関係の分析に不可欠な心理学、など他分野へとその領域を広げる必然性が徐々に明らかになっていったことである。思考が多岐に渡ったがために、この三年間で一つのまとまった論文に仕立て上げることが極めて困難になってしまった。ただし、文学の領域に留まることなく他分野へとすそ野を広げることにより、多くの示唆を受けることが出来、特に哲学と心理学からは多大なるインスピレーションを得たことは幸いであった。もう一つは、申請者の時間的制約のなかで資料収集のために海外（アメリカ・ニューヨーク）にいくことを断念せざるを得なかった点である。海

外出張は具体的な演劇上演資料の入手を目的としていた。しかし、結果的には、具体的な上演資料に頼ることなく、むしろこの三年間で実践した倫理をめぐる思想、心理学的視点からの徹底した演劇テクスト分析が、今回の研究手法としては適当であったと考える。

(6)本研究の一端をまとめた論文「時空を超えて――ポスト 9.11 のニューヨークで再生した『牛乳列車はもう止まらない』」は、『ニューヨーク――錯乱する都市の夢と現実』（論集・西洋近代の都市と芸術・第 7 巻・竹林舎）に掲載されることが決定している。（すでに出版社（竹林舎）に原稿提出済み。近日発行予定）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

６．研究組織
(1)研究代表者
相原　直美　（AIHARA, Naomi）
千葉工業大学・工学部・准教授
研究者番号：５０３３７７０５